

～ ドキュメンタリー映画『がんと生きる 言葉の処方箋』～

新渡戸稲造記念センター センター長
 順天堂大学 名誉教授
 一般社団法人 がん哲学外来 理事長
 「明日を考える会 ～次世代の社会貢献～」
 会長 樋野興夫

ドキュメンタリー 映画（映画「がんと生きる言葉の処方箋」公式サイト - Wix.com）（文部科学省選定）が上映されることになった。5月3日～24日（10:00～11:30）は、新宿武蔵野館に於いて。さらに、<名古屋公開> ★名古屋シネマスコレ 5月11日（土）～24日（金）・<大阪公開> ★第七藝術劇場 6月8日（土）～14日（金）12時～13時30分、6月15日（土）～21日（金）10時～11時30分・<京都公演> ★京都シネマ 6月15日（土）～6月21日（金）とのことである。驚きである！

新渡戸稲造（1862-1933）は、国際連盟事務次長時代に、「知的協力委員会」(後のユネスコ)を構成し、知的対話を行った。そのメンバー中には、当時の最高の頭脳を代表するアインシュタイン、キュリー夫人もいたことは 特記すべきことである。今こそ「医療の協働体」の新時代に向けて、「21世紀の知的協力委員会 ～ドキュメンタリー映画『がんと生きる 言葉の処方箋』～」の世界発信の時ではなからうか。ここに、「明日を考える会 ～世代の社会貢献～」の存在意義があろう！

2003年に初版『われ21世紀の新渡戸とならん』、2018年に新訂版、2019年4月には英語版『I Want to Be the 21st Century Inazo Nitobe』が発行されることになった。タイミング的に、筆者は、4月より「新渡戸稲造記念センター長」を仰せつかった。人知を超えて、時が進んでいることを痛感する日々である。『もしかするとこの時のためかもしれない。』（エステル記4章14節）が、鮮明に蘇る日々である。

～ 「分かち合う」とは～

編集者

渡辺和子さんがマザーテレサのこんなエピソードを書かれています。8人の持ちの貧しい家族がこのところ何も食べていないと聞き、マザーは家族一食分のお米を持ってその家に行きました。母親はマザーからお米を受け取ると、それを半分に分け、そそくさと家から出ていきました。しばらくして戻ってきたので、どこへ行ってたのか尋ねると、「彼らもお腹を空かせているのです」と答えたのです。彼女が指し示した先は、隣に住んでいる別の家族がいて、そこにも8人の子供がおり、やはり食べるものがなかったのです。この母親はその事を知っていて、受け取ったわずかなお米の半分をその家族と分け合ったのです。

その母親は、自分の貧しさにもかかわらず、分け合うことの喜びを知っていたのだと。そしてマザーはこう述懐していたそうです。「富の中から分かち合うのではなく、無いものを分かち合う、それが彼らの素晴らしさ」なのだ。「何も無いところにこそ、真の自由がある」のだと。

翻って、がん哲学外来に集うお一人お一人は様々な痛みを知っている、謂わば「-（マイナス）」の存在です。そのような者同士が互いに寄り添い、温もりや思いやりを分かち合う中で豊かなハーモニーが醸し出される。そこにこそ、人々を惹きつけて止まないがん哲学外来の魅力があるのではないか、そんな風に感じている昨今です。

明日を
考える
ヒント

「神が人に絶望を与えるのはその人を殺すためではない。新しい生命を呼び起こすためである。」
 「人生の義務はたったひとつしかない。それは幸福になることなんだ。」 (ヘルマン・ヘッセ)